

# 打放しコンクリートの住宅に暮らして ～その後～

建築家・植田 崇郎氏の自宅兼事務所を訪ねて

小誌2009年7月号で、自ら設計した打放しコンクリートの自宅兼事務所に暮らす、植田崇郎氏(植田建築計画事務所)を紹介した。その時の取材で植田氏は、見た目には豪快で荒々しいイメージの打放しコンクリート建築が、実は極めて繊細な作業の上に成り立っていることなど、その設計・施工の難しさや魅力について述べたうえで、住まいとしての打放しコンクリート住宅については、「住む人は覚悟が必要」と、その苦労話を語ってくれた。壁をツタで覆い、屋上には土を入れて緑化するなど熱対策を施しながら打放しの住宅と付き合いしてきた植田氏。昨年夏は猛暑、そして今年の夏は電力供給の悪化と、取材した2年前とは状況が変化する中、再び植田氏を訪ね、打放しコンクリート住宅について話をうかがった。(取材・編集部)

## 築16年の打放し住宅

植田氏の住宅兼事務所は東京都新宿区下落合のとある斜面に建つ3階建て。1995(平成7)年の竣工当時は2階建てで、その後、高めにとってあった屋上の手すり外壁の延長を利用し、それに屋根を架けるようにして3階を増築したという。

斜面の上には道路が走っており、そこに面した2階お



一昨年撮影した植田氏の自宅兼事務所。すでに植栽の勢いがすごかった。

うえだ・たかお

1977年早稲田大学大学院理工学研究科修了。91年に坂倉建築研究所を退所し植田建築計画事務所を設立。2001年には「チャペル・ルシア」でグッド・ペインティング・カラー最優秀賞を受賞。湿式仕上げを巧みに用いた建築作品を多く手がけている。



よび3階が住居、斜面を降りた1階が事務所になっている。

2年前に取材した時と変わらずに、道に面した北側の外壁には目立った汚れはない。この日は訪問前に俄か雨が降ったのだが、その水滴を壁が弾いている。撥水材の効果だろう。ちなみにその壁には、16年前の新築時に撥水材を塗って以来、何も手をかけていないとのことだった。表面がやや白っぽくなっているが、それも時間の経過を示す年輪のようで、風格らしきものすら感じられる。

斜面を下りる階段に面した建物東側と事務所玄関前には植栽がある。中でも目を引くのが玄関前のケヤキの木だ。建物よりもはるかに高く伸びており、シンボリックな印象を受ける。



竣工間もないころの写真。今では外壁の大半を覆っている植物は、まだほとんどない。



小さな水切りでも劣化防止効果は大きいと植田氏は語る。また、塗装後16年経過した撥水材の性能も落ちていない。

事務所に入り、植田氏に話をうかがう。斜面の下にあるのと、玄関前のケヤキのせいで、日射は少なく空気はひんやりしている。

「躯体が熱を持っていないので、この時期はかえってこの部屋は外より涼しいこともあるのです。」

と言いつつ植田氏は、

「でも、暑い日が何日か続いて躯体が蓄熱してしまえばもうかいません。てきめんに影響は出てきます。また、冬は冬で非常に寒さが厳しく、結露も生じます。」

「決して住みやすくない」という覚悟を持って、16年前に打放しコンクリートの自宅を建てた植田氏は、当初から壁の内側に厚さ20mmほどの発泡ポリスチレン+PBの複合断熱材を張っているのだが、それだけではとても追いつかないという。ただ、この建物の熱対策は断熱材だけではない。大胆とも言える大がかりな緑化が、夏の温度上昇の抑制に一役買っているのだ。

## 想像を超える植物の成長力

2年前に取材した際、西側の外壁を覆うツタと、屋上からはみ出すように伸びる植栽に驚かされたのだが、それらの植物は今も健在どころか、さらに勢いを増しているように思える。ツタは北面の3階屋根部分にまで弦を伸ばし、また屋上から手すりを越えて垂れ下がる植物も以前より多い。もちろんこれらは、植田氏が意図的に植えた植物であり、無計画なものではない。しかしながら、その想像を超えた勢いには植田氏も辟易させられることがあるという。

「今ぐらいの季節になると、一週間も刈らないでいるとツタが伸び過ぎて3階の窓一面を覆いつくしてしま



1階玄関前のケヤキ。植栽時4mだった木が建物の高さをはるかに超えるまでに成長。



内壁には発泡ポリスチレン断熱材が張られている。

います。また東側の植栽などは、成長し過ぎて私の手には負えなくなり、植木屋さんに刈ってもらったこともあります。1階玄関前のケヤキに蛾が大量発生したこともありました。ですが、実はそれらの植物は、打放しコンクリートの住宅だから植えたというよりも、そもそも植物を植えたいがために打放しコンクリートの住宅を建てたという方が正しいのです。植物は、はじめから家の一部として考えていますので、厄介なこともあります。どうかコントロールしながら付き合っていくしかありませんね。」

このように、「家ととことん付き合う」という意識があるからこそ、植田氏は打放しコンクリートの住宅でも暮らしていけるのかも知れない。